アメリカと私

江藤 淳

朝日新聞社

江藤　淳（えとう　じゅん）（江頭淳夫）
1933年（昭和8）東京に生れる。慶応大学英文学科卒業。文芸評論家。62年8月ロックフェラー財団研究員として渡米し、翌年から一年間、米プリンストン大学東洋学科客員助教授。64年8月帰国。著書に「夏目漱石」「奴隷の思想を排す」「作家論」「小林秀雄」「西洋の影」「文芸時評」その他がある。

アメリカと私
定価／四八〇円
昭和四〇年二月一五日第一刷発行
著者／江藤淳
発行者／浜名二正
印刷所／図書印刷
発行所／東京 大阪 北九州 名古屋／朝日新聞社

© 江藤淳　一九六五年

アメリカと私　目次

第一部　アメリカと私

7　適者生存
24　プリンストン
39　大学（*Princeton in the Nation's Service*）
55　城（死と蘇生、及び自動車のこと）
71　パーティー
86　東と西
102　普林亭主人
117　学生たち
133　事件
150　別れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部　アメリカ通信

169　第一信
179　十月二十八日の午後
186　キューバ危機の中で
190　〝不安な巨人〟日本について
200　生きている〝古さ〟
204　合衆国と地方主義
215　深い南北の溝
219　冬と春の間
230　青春と狂気
241　海老原喜之助の回顧展（短い滞日中の幸福な体験）

249 私の見たアメリカ
259 ケネディ以後
265 エリート
272 アメリカの古い顔
282 国家・個人・言葉
293 米国から欧州へ
304 学問の自由化
あとがき

箱絵　江藤慶子（著者夫人）
写真　著者及び夫人
装本　岡島伴郎

第一部　アメリカと私

適者生存

あるとき、米国人の友人がいった。

「外国暮しの『安全圏』も一年までだね。一年だとすぐもとの生活に戻れるが、二年いると自分のなかのなにかが確実に変ってしまう。ぼくは近ごろ周囲の連中と調子が合わなくなって困っている」

彼は当時まさに二年半ぶりで日本から帰って来たところであった。私のほうはといえば、プリンストンに居を定めて、まだ二ヵ月とたっていなかった。ニューヘヴンの郊外に住むこの友人と、ニューヨークの下町のホテルでおちあい、お互いに細君同伴でグリニッチ・ヴィレジに晩飯を食いに行ったときの話である。この言葉は、その後も妙に記憶に残っていて、折りにふれて私は彼のテレたような、居直ったような、さびしそうなところがなくもない語調を思い出した。そして、それから二年後に帰京したいま、私は、そのときの彼の言葉が、あらためて身内になまなましくよみがえって来るのを感じている。当時の彼が味わっていたのと同様の間尺にあわぬ思いを、おそらく現在の私もまた経験しつつあるからである。

異質な文化のなかで、少し長い間暮していると、人間のなにがどう変るのかは、一口にはいえない。ふりかえって思えば、私がことさらアメリカ式の生活をしていたわけではない。私は単に自分の身にあった暮しかたをしようとつとめ、ある程度までそれができたと思うだけである。身にあった暮しとは、好きな人間とつきあい、きらいな人間とはつきあわず、余事にわずらわされずに、出来るだけ多くの時間を興味のある仕事にさく、という暮しかたである。私は米国に行く前にもそうしていた。「していた」といって悪ければ、懸命にそうしようとしていた。同様のことが、実はプリンストンでも繰返されたにすぎない。それが「生活」というものであって、人間に首があるようにおのおのの「生活」にも首があり、それは二年やそこら外国に住んだぐらいですげかえのきくものではない。そういう旧弊な思想の、私はいまだに信奉者である。

したがって、私のなかのなにかが変ったとすれば、それは私の「生活」が——あるいは身にあった暮しかたが——一変したからではない。逆に、それがどうにも変えようがなかったからである。異質の文化のなかで、自分の同一性(アイデンティティ)を保とうとすれば、かならず異質の手つづきが必要になる。その手つづきが、おそらく私のなにかを微妙に、しかしかなり確実に変えたであろう。そのことを、私は米国ですでに感じ、三年ぶりに訪れた欧州で感じ、さらに帰って来た東京で一層強く感じた。もとより東京そのものも、しばらく見ぬ間に驚くべき変貌をとげていた。しかし、そのことについては、あらためて別に書く機会もあるだろう。

自己の同一性を保つために、異質の手つづきを習得するというのは、至極厄介な仕事である。が、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

厄介だといっておりてしまえば、それは米国にいる間「生活」からおりていることを意味する。もし私が、ある種の日本の幸福な若手学者たちのように、しばしの米国滞在を、自動車が持てて「外人」とつきあえる長い休暇だと観念していたら、いっそ気が楽だったに違いない。しかし、私には、そうするためには人生はあまりに短かすぎるように思えた。日本も米国も、ともに戦後の「進歩的」思想家の愚痴の対象にしておくには、豊富な問題をはらむ国でありすぎるように見えた。さらに、おりるのがきらいな私には、「海外生活」というキラキラした舞台にのぼる役まわりも気に入らなかった。「何でも見てやろう」というおりた観察者の姿勢に無理があるように、「いつでも眺められている」という自意識に縛られた演技者のポーズも不自由なものである。それらはふたつながら平常心を欠いている。「生活」というものが、ひっきょう見たり見られたりという戦いの連続である以上――しかもだれもとくに意識してそうしているのではない以上、見る一方、あるいは見られる一方という外国生活が、健康なものだという理由はないのである。

ロサンゼルスのモテル

そういう暮しかたをとにかく二年間つづけて来たにもか

かわらず――あるいはそのために――、私は、いま自分のうちのなにかが変ったと感じている。それは、どんな親しい友人ともわかち持てない一部分が、自分のなかに出来てしまったような感覚である。この部分は、時が経過するにつれてなくなってしまうかも知れない。あるいはいつまでもなくならずにいるかも知れない。私と同じ年ごろに西洋から帰って来た永井荷風が、『監獄署の裏』で、「閣下よ、私は淋しい……」と絶句したとき身内に覚えていたのは、私のそれに似たものではなかったろうか。あるいは、森鷗外の『かのやうに』の主人公五条秀麿が、「附合に物を言っている」ような男になり変って帰朝したのも、つまりはあのなにかのせいではなかったろうか。

爾来半世紀の歳月が流れ、荷風が『監獄署の裏』に描いた旧い貧しい東京は、高速道路の四通した第二のロサンゼルスのような巨大な近代都市に変容しつつある。これはまさしくめざましい「近代化」だ。しかし決して「西洋化」ではない。そうでないことを、二年ぶりで西洋から帰って来た私は、自分の肌に感じている。そして、そういう感覚がいまだに帰朝者にとってのひとつの現実である以上、荷風や鷗外の「淋しさ」や「諦め」の誘惑が、異質の文化に自分の内部をさらした者の心に忍び入ることは、避けられない。これは、もとより彼我の文化が同質ではなく、その相違が単なる量の相違に還元出来ぬ性質のものだからである。

このことを、私はしかし「附合い」でいうのではない。自分のなかに、親しい友人とさえ容易にわかち持てぬなにかがあると感じるからこそ、私はそれについて書かなければならない。それは、大きくいえば「外の世界」を経験して来た日本人に伝統的に課せられている義務であり、小さくいえば私

一個の必要のためである。いずれにせよ、私は、いまあらためて「自己の同一性を保つために、異質の手つづきを習得する」段階にさしかかっている。どうやら私は、かつて空気のように自然なものと感じていた日本の社会をどこか「異質」と感じるほど深く米国の社会につかってしまっていたらしい。もちろんそうなるまでにはかなりの時間がかかった。私が、米国の新しい環境で、もとの自分をとり戻すまでにすら、「生活」が気化して行くような、あるいは自分の存在意義が無限に縮小して行くような、短いがかなり深い混乱の時期があった。まず、そのころのことから書きはじめようと思う。

私のパスポートには、「一九六二年八月二十七日、シアトルにて」という合衆国移民局の入国許可のスタンプが押してある。私は、このスタンプを、カナダのヴァンクーヴァー空港に出張していた合衆国移民局の担当官からもらい、ひきかえに身体検査の証明書をわたした。この瞬間が、少なくとも公式には、アメリカと私との接触のはじまりであった。私は、丹念に書類をひっくりかえしている係官にしびれをきらして、

「もういいですか」

と訊いた。彼はびっくりしたような顔で、

「もういいですよ」

といった。

査証によれば、私の身分は、「文化学術交流計画」のもとにおける「非移民訪問者（ノン・イミグラント・ヴィジター）」であり、ロ

ックフェラー財団研究員として、ニュージャージイ州のプリンストン大学に配属されることになっていた。この身分は、のちに私がプリンストンで日本文学の講座を持つようになってから、変更され、査証の分類も変った。これは、私が財団からの贈与によってではなく、大学と直接契約した教師として、給料によって生活するようになったためである。だが、とにかく、このとき私は年に何千人米国にやって来るか知れない、種々雑多の、いわゆる「カルチュラル・エクスチェンジ・ヴィジター」のひとりにすぎなかった。

私が批評家として多少の仕事をしていることを知っている者が、米国に何人いるかおぼつかない。その仕事の内容については、まずだれ一人知る者がないであろう。だが、これは、日本語が英語やフランス語のような国際語でない以上、黙って引受けなければならぬハンディキャップである。この国で批評家—文学者としての自分を主張しようとしたら、もう一度序の口からやり直すほかはない。私は、これは厄介なことになったと思わざるを得なかった。前年の夏に、二ヵ月ほど欧州を旅行していた私には、はじめて外国に旅するという感激はもうなかった。米国はもともと旅情をそそるような国ではない。シアトル—サンフランシスコ間のジェット機の窓から、かつて永井荷風が眺めたに違いない「タコマ富士」が夕暮れに浮出ているのを眺めながら、出来ることならこの国にひとりの「エクスチェンジ・ヴィジター」としてではなく、批評家—文学者としての自分の署名入りの痕跡を残したい、と私は考えていた。

だが、私が——正確にいえば家内と私が、アメリカという国の現実に直面したのは、ロサンゼルス

に着いてからである。最初に寄ったカナダのヴァンクーヴァーでは、われわれは加藤周一氏の客であった。町中が隠居所みたいなこの町にある、いかにも田舎の新興大学らしいブリティッシュ・コロンビア大学には、「落ち行く先は九州相良……」といった感じの政治的失意の学者やジャーナリストが、ある挫折感のなかでひっそり暮していた。そこには一九三〇年代のニューディール左派への郷愁があり、同時にどこか同人雑誌のようなふんいきがなくもなかった。そんな町のそんな大学に、加藤氏は十日ほど前東京から帰りついたところで、われわれは見物や領事館での宴会のあい間に、東京の文壇の噂話をした。あるティー・パーティーで、加藤氏が、テープに吹込んでひと月足らずでこしらえたという「読書術」という本で、実にカナダ・ダラーにして一万ドル以上の金をもうけたという話をしたとき、いあわせたカナダ人学者の顔に浮んだ素朴な驚嘆の表情を、私は忘れない。

要するに、カナダはカナダであってアメリカではない。そこにいた数日のあいだは、私たちは、依然として東京の話をしている旅行者にすぎなかった。サンフランシスコに着いてからさえ、なお私は東京の延長にいた。英領植民地から発展した静的なカナダと、英本国と戦争をして独立した合衆国とが、全く異質な社会を持っているらしいというぐらいのことは、一瞥してわかっていたが、私にはなお朝日新聞の池添通信員と会って、相談の上原稿をひとつ書いて送るという「仕事」があったからである。三、四日かかって「仕事」を片づけ、空港まで送りに来てくれた池添氏に原稿を渡した瞬間に、私を東京につなげていた糸が切れた。これは、別の言葉でいえば、今後当分の間原稿を売って暮すという経済生活に頼ることができない、という意味である。同時に、そういう経済生活に付着して

いる内輪話は、もうだれにも通じないという意味である。ロサンゼルスにむかうジェット機のなかで、私は、「やはりロックフェラー財団にかけあって、給費を増額してもらおう」と決心した。

ロックフェラー財団は往復旅費のほかに、私たち夫婦の一カ月の生活費（研究費を含む）として、三五〇ドルを支給することになっていた。不思議なことは、米国経済の発展にともなう諸物価の急騰にもかかわらず、この金額が十年以前の基準のまま据置かれていたということである。出発前に東京で会ったプリンストン大学のロックウッド教授夫妻にこの話をすると、異口同音に、

「それは無理だ。プリンストンはとくに物価が高いから、とても暮せませんよ」

ということであった。「仕事」の関係で食事をともにしたサンフランシスコの日米時事新聞社社長浅野氏は、顔を真赤にして、

「そんな失敬な。日本人をみくびりおって！」

と大音声をあげて私たちをおどろかせた。

私には、米国生活の機会をあたえてくれたロックフェラー財団を、あえて「失敬」と呼ぶ気持はない。しかし、夏目漱石の評伝を書いて批評家になった私は、留学中の金の不足が、精神にどんな悪影響を及ぼすものかをつぶさに知っている。財団の善意に応えるためにも、滞米をより効果的ならしめるような給費の増額を要求するのは、むしろ自然なことと思われた。貧乏暮しに歪められたひがんだ眼でアメリカを見るより、人並みな経済生活をして虚心にこの国の暮しを味わうほうが、お互いにどれほど生産的か知れないからである。それに、金に守られていない人間の尊厳などは脆いものだ。戦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com